

うである。かれの関心は精神衛生法に集中していたのかもしれない。

断種法反対の態度をはつきりうちだしていた人としてはほかに、慶応義塾大学教授の植松七九郎、『脳』の編集者であった菊地甚一、変質可変論をといっていた成田勝郎がいる。植松は金子とともに昭和医学専門学校で精神病学を教授し、また戦後には(いわば金子にかつがれて)東京精神病院協会および日本精神病院協会の理事長にもなった。いづれにせよ、植松と金子とはきわめてちかい間柄にあった。「植松先生もわたしの意見に影響されたのかもしれない」と、金子はわたしにかたられた。

なお、当時の精神病医の多くは、精神病患者が子をうまぬ結果にいたることという意味での広義断種(入院や、個別例での任意断種処置をふくむ)には賛成しており、この点は金子もおなじであった。問題点は、それを法律をもっておしつけるかどうか、ということにあった。

(平成十一年一月例会)

〔追記〕大空社倒産により、著作集刊行は中止となった。

横浜と痘瘡

中西淳朗

今回の表題は舌たらずで、「幕末における横浜の痘瘡の歴史」補遺として述べた。

幕末期の横浜は都市としての形態が未成熟であるので、痘瘡の流行に関する記録はまことに少い。その中で、大滝紀雄氏著の『かながわの医療探訪』に、東海道生麦の「関口日記」に天保四年、八年、十五年に多発したと書かれており、七十人以上の患者の約四分之一が死亡したという。日本版『臨床診断と治療』(一九七四年版・丸善)によると、七〇年代の痘瘡死亡率は大痘瘡で二〇%であるから、一五〇年前に死亡率二五%位と云う数字は、今後の検討を要するといえども全く的はずれではないと考える。

外国人の記録であるが、ヘボン先生には痘瘡の流行に関するメモはないようである。一方、W・ウィリスの一八六三年四月三〇日、並に五月十三日の手紙では、艦隊内の発生と消滅についてふれてある。しかし翌一八六四年(元治元)年六月二六日付の手紙では、日本人に流行して、公使館々員も発病したし、居留地外人に死者が出たことを報じている。さらに同年十一月三〇日の手紙には、「民間の痘瘡病院に医療指

導の口を申し込みました」と書いている。

この痘瘡病院について、小寺篤著の『横浜山手変遷誌』で調べたところ、山手居留地七六番で千二百坪、借地料無税で借受人は各国痘瘡病院と記され、一八六二(文久二年)に額坂に面した土地にたてられたことが判明した。即ち、文久三年以前から小流行が横浜地方にあり、これを恐れた外国人が金を出しあって、民間の痘瘡病院を建てたことがわかった。

次に、英仏の駐屯軍隊が中国から痘瘡を搬入したかの疑問について調査したが、現段階では英国陸軍第二〇連隊の正式記録全文を入手していない)不明であった。

横浜開港資料館の平成八年秋期企画展「石けん工業の創始者・堤磯右衛門の生涯」で、堤家薬品目録が公開された。その中に、痘瘡の治療薬が記されており、叔父の堤 升軒(大坂塩町通きや町で安政六年に死亡・牧岡天来の弟子)医師から伝受された処方と考えられる。

略記すると、序熱期には金化粧の方を用う。見点の後は桔梗湯方を用う。起脹より後は黄氏湯方を用う。膿をとるゝとなる。金化粧は金牙石(蛇岩石・硫化鉄)のことらしく、序熱から見点への移行期にみられる柴斑又は血疱形成(重症徴候)を予め防止しようと試みたと考えられる。金牙石は「延喜式出雲本」の和名考異の章に銅牙という名で収載されている。

最後に、横浜市金沢区瀬戸の金竜禅院で発見された「医方巻石秘録」(処方撰者は上毛・島鴻子漸)の中から、治痘処方

ひろってみたので報告に加えた。この処方集によると、序熱期には六味稀豆飲(山楂子、紫草、牛旁子、防風、荆芥、甘草)を、見点期には軽斑散(丝瓜、硃砂、砂糖)を、起脹期には赤水玄珠小靈丹(硃砂、雄黄、乳香、沒藥、大蟾蜍、麝香)を、灌膿期には薰氏当婦人參湯(薰氏、当婦、人參、生姜)を、取膿期には補中益氣湯(黄氏、蒼朮、人參、当歸、柴胡、大棗、陳皮、甘草、升麻、生姜)を用うとなっている。前者二処方については『保赤全書』からの引用と註が入れている。

またこの処方集の中には、蛮語ポルトガル語?、永富独嘯庵の意見、香月牛山の意見等が記入されている。(旧所有者は六浦藩々医か)

今回、横浜市南部の郊外から新たに見出された二資料をもとに、幕末に東海道からはなれた郊外でも痘瘡に対する準備がなされていたことを掘りおこすことが出来た。

しかし、ここに記した各処方の有効性まで論ずるものではない。

(平成十一年一月例会)